筑波技術大学
産学官連携
シーズ

# 聴覚障害教育におけるキューサインの歴史と現状、その意義に関する検討

障害者高等教育研究支援センター・准教授　脇中 起余子

## キーワード

キューサイン、キュードスピーチ、聾学校、発音誘導サイン、読話

## 研究概要

日本の「キュードスピーチ」は、京都府立聾学校が用い始めたのが始まりである。ただし、京都校は、のちに「キュードスピーチ」（コミュニケーション手段）になってはいけないとして、「キューサイン」（口話法の補助手段）という語を用いるようになった。キューは50音体系を可視化するものであり、指文字とは異質なものである（脇中，2017）。ネットなどで「アメリカのコーネットが考案したキュードスピーチを、京都校が取り入れた」という記述が散見されるが、京都校は、戦前から発音指導場面で使われた発音誘導サインを日本語指導場面でも使用して、小1からの小1の教科書の使用を可能たらしめたのである。また、「1968年頃に京都校でキューの使用が始められた」という記述も散見されるが、京都校が1965～66年のろう教育科学会で発表したのがきっかけであり、筆者は、京都校が公開する前にキューで日本語を獲得した。そこで、京都校の研究紀要などをもとにキューの歴史を詳細にまとめたり、京都の聴覚障害者に聞き取り調査を行ったりして、1963～1964年度にはキューの使用が始まった可能性が高いことをまとめた（脇中，2018）。

京都校の発表後、キューの使用は全国に広がった。筆者らは、2018年に全国の聾学校に対するアンケート調査を行い、キューを現在も使用する聾学校は回答校の約16%であること、キュー廃止校を含めたキュー経験校は50～54%と推定されることをまとめた（脇中・原島・長南，2020）。また、現在のキューサインは聾学校によって異なっており、キューサインや発音誘導サインの使用の廃止は、指文字の導入という要因と密接に関連することを見出した（脇中・原島・長南，2021）。

従来から「キューで育った子は、日本語の力や読話の力が高い例が多い」ことが指摘されているが、乳幼児期におけるキューの使用は日本語、特に学習言語の獲得に寄与することを示すデータを、現在収集・分析中である。

## 応用例・用途

障害者手帳をもたない軽度難聴児や人工内耳装用児であっても、いわゆる学習言語の正確な受信が難しい例がみられるが、乳幼児期の短期間であっても、キューの使用経験が「日本語で考える習慣」や「読話や聴覚活用の習慣」の形成に寄与するのであれば、今後の聴覚障害教育の方法を検討する際の参考になるであろう。そのためにも、手指の操作性が未熟な１～２歳児でも扱える「共通キューサイン」や「口形文字」を考案中である。

国立大学法人 筑波技術大学　学術・研究委員会
【問い合わせ先】
〒305-8520　茨城県つくば市天久保4-3-15　総務課　学術・社会貢献係
TEL：029-858-9339　FAX：029-858-9312　kenkyo@ad.tsukuba-tech.ac.jp